

## 名古屋 400 年の歴史

溝口常俊「古地図で名古屋をみる」(『地図情報』37-2/2017) から、標題を概観していこう。一古地図を挟みつつ、わかりやすく黄金から黒、白、そして緑へと色に例えて、名古屋 400 年の歴史を振り返ってみたい。

### 1 黄金の近世都市一城と宮

本格的に名古屋の街が形成されるのは慶長 15(1610)年からである。徳川家康がわが子義直を尾張新領主にするために名古屋城の築城に着手した年で、その年に築城用の石材・物資を運ぶための人工河川堀川が熱田台地の西縁に沿って開削された年でもある。近世都市、名古屋を色でイメージすると、それは名古屋城の金の鯨と宗春のきらびやかさからくる「黄金」であり、それは名古屋城と堀川、本町通りの水陸両ルートで結びつけられた熱田神宮の町「宮」がもたらす「黄金」でもあった。



図2 「尾府名古屋図」正徳4(1714)年 名古屋市蓬左文庫蔵

### 2 黒い近代都市形成一産業と軍事

工業化のなかで、異彩を放つのが軍事施設の設定と軍事工場の出現である。名古屋城地区が「黒」でイメージされる軍事色が強まっていった。北千種町に兵器支廠があり、熱田神宮東の広大な敷地には東京砲兵工廠熱田兵器製造所や大阪砲兵工廠が建造された。さらには、名古屋駅と名古屋港を結ぶ貨物輸送鉄道「臨港線」も敷設された。このように明治時代後半から第二次世界大戦終了の昭和 20 年までは、城と宮の地が軍事面でも結びつきを強化していった。



図4 軍事基地化した名古屋城(「名古屋市街新地図」大正11年による) 国際日本文化研究センター蔵約3万7000分1で表示

### 3 白い現代都市一戦後復興

まさに焦土と化し、真っ白になったキャンパスに大胆な都市プランを描いた。このプランは地上のみにとどまらず地下にも活かされた。広い道路と地下商店街の形成という方向性が、現在の名古屋の地上空間にゆとりをもたせている。それ故に「白」のイメージが強いわけであるが、それにどのような色を付けていくか、若い世代の力量が問われる実験都市でもある。

### 4 緑の未来都市に向けて

(2017年12月13日)